



吉野町内の  
平安時代末ゆかりの場所・伝説地  
(場所はおおよそです。詳しい場所が分からないものもあります。)

# 吉野町内の平安時代末ゆかりの場所

## ■源平の合戦前後、そのとき何があった？ 吉野では？

平家打倒を成し遂げた源義経。しかし、兄・頼朝との不仲が決定的になってしまいました。義経は頼朝のもとへ弁明に向かいますが、会うことさえ許されません。義経は頼朝と戦うことを決意するのです。義経は体制を整えるべく九州に向かいますが、大物浦で嵐にあって計画は頓挫。嵐で部下の大半を失った義経は、母の故郷である宇陀市牧に身を寄せ、その後、吉野山に身を隠します。しかし、吉野山の衆徒は義経と敵対する道を選びます。また、愛妾・静御前、部下・佐藤忠信との別れも待ち受けていました。

## ■そのほか平安末の吉野で、そのとき何があった？

この頃、歌人として著名な西行法師が吉野を訪れていました。この頃まで、歌の世界での吉野のイメージは、雪や雲の世界でした。しかし、西行が桜の歌を多く詠んだことで、吉野に桜のイメージが定着していくことになります。例えば、次の歌があります。

**吉野山 去年の枝折の 道かえて 未だ見ぬ方の 花を尋ねん**  
また、西行は大峯奥蘆修行もおこなったようで、その時の歌も残っています。

## ■平安時代末の主な人物

- 源義経 …源義朝の九男。平家との戦いで活躍した。幼名は牛若丸、遮那王。
- 静御前 …義経の愛妾。義経に同行したが、吉野山で別れることとなった。
- 佐藤忠信…義経四天王とも呼ばれた、義経の部下の一人。奥州出身。
- 狐忠信 …義経が上皇から賜った鼓ゆかりの狐。静の道行を見守ったという。
- 弁慶 …義経四天王とも呼ばれた、義経の部下の一人。
- 源頼朝 …義経の異母兄。平家打倒を指揮した。
- 横川覚範…吉野山の衆徒を率い、義経を追討した武将。
- 常盤御前…義経の母。旧上龍門村、今の宇陀市牧出身。
- 西行法師…有名な歌人。吉野山にもしばしば訪れた。



## ■源平の合戦の経過とその頃の吉野のできごと(年表)

年	月	内容
1147		西行法師、この年以降、吉野山をしばしば訪れる。
1159		義経(牛若丸)、源義朝の九男として誕生。鞍馬山で育ち、奥州へ。
1172		この頃、西行が笙の岩屋にこもる。
1179		平家、後白河法皇を幽閉。平家反対派の公家を解官
		以仁王、対平家に向けて挙兵。敗死。
1180	4	平家、源仲綱の子二人などが、吉野山に住しているか調べる。
	5	源頼朝、平家を倒すべく、挙兵する。
	8	義経、兄・頼朝に合流し、傘下に入る。
1183	7	多武峰、金峯山の僧徒、源氏にに応じて蜂起する。
	10	義経、京都に入り、平家と対峙する。
1184	2	義経、一の谷の戦いに勝利。
	6	重源、吉野山の奥で東大寺用の木を見出す。
	3	義経、壇ノ浦の戦いに勝利。平家滅ぶ。以後、頼朝と不仲になる。
	10	義経、頼朝討伐の宣旨を得る。頼朝、対義経の軍を出す。
	11	義経、京都退去。頼朝軍入京。義経追補の宣旨が出される。
1185		義経、大物の浦で嵐にあって。後、宇陀をへて吉野山に逃れる。
	12	静、義経と別れた後、吉野山でつかまる。
	12	吉野山、義経に対して蜂起。佐藤忠信が殿となって、義経逃れる。
	12	静、頼朝のもとで義経の行方等の取り調べをうける。
1186	2	義経の行方を探すが吉野山などに出される。
1186	3	静、鶴岡八幡宮で舞わされる
1187	2	義経、奥州へ逃れ、藤原氏に匿われる。
1189	4	奥州藤原氏、義経を襲撃。義経自刃。翌年、奥州滅ぶ。
1190		西行法師、没する。



【吉野山地区】  
**愛染** 吉野山を逃れた義経は、愛染峠を越えて、川上村の太刀屋へのがれたと伝わります。また、ここで義経は「二月二十日を除いて人に危害を加えるな」と命じて、愛馬を乗り捨てたとも言います。その馬は尾根伝いに伯母峰に至り、背に笹が生えるほど生き延びて、一本だけ（猪笹王）になったとも言います。

**勝手神社** 吉野山で義経と別れた静御前。間もなく従者に裏切られ、金銀を奪われて、一人山中をさまよう事になります。やっこの思いで吉野山の集落にたどり着いたとき、吉野衆徒に捕らえられ、舞の名手だからと勝手神社の前で法楽の舞を舞わされたと言われます。

異なる話も伝わります。静御前が勝手神社で舞ったことで、吉野衆徒の心がとがされ、義経追討の気持ちもなくさせたとはいわれます。

この神社には、静御前の装束と義経の鎧が収められています。たそうですが、正保年間に火災で焼失したようです。静御前が舞った場所には今、舞塚の石碑が残ります。



**狐忠信塚** 金峯山寺の元管長・五條覚澄師が狐にまつわる不思議な体験をし、その狐から脳天大神の参道に祀ってほしいと頼まれたそうです。覚澄師はこの狐は狐忠信の霊に違いないと感じ、「狐忠信塚」の建立を決定したといわれています。

**金峯山寺** 吉野衆徒にとらえられた後、舞を

**義経の矢竹** 吉水神社の門をくぐってすぐのところに生える竹です。義経がこの竹をきって弓矢にしたと言われています。

**義経鎧懸松** 高城山の南に義経鎧懸松という松があったと伝わります。

**吉水神社** 吉水神社の書院に、義経潜居の間と弁慶試案の間という部屋があります。

義経一行は文治元（1189）年11月17日に吉水院に身を隠したと伝わります。この時の部屋が義経潜居の間です。しかし、吉野の衆徒の協力を得られず、僅か5日間で逃れたといわれています。また、弁慶試案の間は、弁慶が義経のために知恵を絞った場所だと言われています。

ちなみに吉水神社には、義経一行ゆかりの品々として、義経所用の色々威腹巻や鞍・鎧、静所用の鎧、弁慶所持の籠手や七つ道具、佐藤忠信所持の兜などが伝えられています。

**龍が谷** 義経がここで馬を捨てたといわれています。また、この谷の東に、義経が竹をたわめて向かいに渡ったという場所があるといわれています。

【中柱】  
**うたたね橋** 象の小川が吉野川に注ぎこむ辺りにかかっていた橋です。屋根がついた屋根形橋だったと伝わります。義経（静とも）が、疲労のためこの橋でうたたねをしたので、この名がつけられたと言われています。

**馬廻し** 檜尾から西河へ抜ける五社峠の手

舞わされた静御前（勝手神社の欄を参照）ですが、『義経記』ではその場所を、蔵王権現の御前としています。もしかしたら、かつては金峯山寺にも同様の言い伝えがあったのでしょうか。

また、義経が吉野山に隠れている時、静御前が京都から吉野へやってきたと言います。其の時、狐忠信が蔵王権現の使神として、静御前を守護したそうです。役目を終えた狐忠信は、蔵王堂付近で帰祠し、蔵王堂周辺で不思議な霊示を見せ続けていたといわれています。

**化粧岩と鏡岩** 吉野山の上千本から喜佐谷に通じる山道に、化粧岩と鏡岩と呼ばれる岩があります。化粧岩は三畳敷きほどの広さの岩で、静御前が化粧を整えた場所だといわれています。鏡岩は化粧岩から30mほど下った所にあり、十二畳ほどの大きさの立岩だといわれています。静御前が化粧した後の姿を写したといわれています。

**西行庵** 西行法師が3年間、ここで過ごしたと伝わります。江戸時代に西行法師像が置かれ、今、その像は吉野水分神社に残ります。（西行庵には2代目の像が置かれています。）近くには、西行が歌を詠んだという苔清水もあります。

**佐藤忠信花矢倉** 吉野山の中院谷に隠れた義経一行を捕まえようと、横川寛範をはじめとする吉野衆徒たちが押し寄せました。これに対し、殿をつとめて迎え撃ったのが義経四天王の一人・佐藤忠信でした。忠信が戦った場所を、佐藤忠信花矢倉と呼んでいます。

前に馬廻しという広場があります。義経が愛馬を廻して帰した場所といわれています。

**腰掛岩** 喜佐谷の山路の中腹に義経が腰を掛けて休んだという、腰掛岩があるそうです。

**西生寺** 静井戸のある場所がかつて西生寺の境内でした。西生寺はその頃、西光寺といったようですが、静井戸の一件があった後、真言宗から浄土宗に改宗し、西生寺と改めたといえます。また、西生寺にはおそで菜（気付け菜）という名菜があったそうで、静御前のお袖のいわれからできたといわれています。

**静井戸（二つ井戸）** 菜摘の西生寺の近くに小さな井戸があります。この井戸は、義経と別れた静御前が化粧をする際、姿見をした場所といい、また、静御前がこの世をはかなんで身を投げた井戸だともいいます。

静が身を投げた後、静の妄念が井戸から現れて人々を驚かすようになったともいいます。そこで村人は、蓮如上人が飯貝へ巡錫していた折に、法会を頼みました。蓮如は静の振袖に「志ずかには其の形なく白骨のにくをはなれて南無阿弥陀仏」と書き、七日間法会をしました。7日目の夜、蓮如の夢に静が現れ、「長らくの迷いの門出ができた」と話したそうです。

**柴橋** 義経は菜摘の個人宅に三・四十日程逗留したといえます。その折、宮滝の柴橋を遊覧し、



吉野町内にのこる  
**平安末ゆかりの場所**  
**伝説がのこる場所**

**三郎鐘（鷲尾の鐘）** 世尊寺跡に残る梵鐘です。保延5年の年号と平忠盛の銘が残ります。

**高城山** 佐藤忠信がウソの切腹をした場所だと伝わります。また、高城山の下にある谷「遺谷」がその場所だった、ともいいます。

**中院谷** 吉水神社に難を逃れた義経一行は、吉野の衆徒が心変わりしたために、この場所に身を隠したと言います。中院谷は、横川寛範の首塚の背後にある谷だといわれています。

**女人結界碑** 静と別れたのは女人禁制だから、と言われることがあります。その結界跡です。

**花供懺法会** 吉野山で、今も春に行われている会式です。後白河上皇の時代（諸説あります）、吉野山の高算上人が皇后の病気を加持祈禱で治したそうです。これがかきつけで、上人は諸国より一畝一穂の寄進を受ける許可を得ます。この寄進でついた餅を蔵王権現に供えたことが、会式のはじまりとされます。

**藤尾坂** 吉野山の銅鳥居のすぐそばに藤尾坂があります。義経と別れた静がこの坂を下りてきた（義経を慕って登ってきたとも）ところを吉野衆徒に捕らえられたといわれています。藤尾坂ともいいます。

**弁慶力試しの釘** 義経が今の吉水神社で隠



「宮瀧に嵐吹くとも寒からし錦にまさる岩を見にきて」と詠んだといわれています。

**惣立** 菜摘大橋あたりの川原を惣立といえます。義経一行がここで戦略を練っていた時に敵に襲われ、一行が総立ちになったので、この地名が付いたといわれています。

**惣田の奥** 菜摘から竜門に通じる山の鞍部の呼び名です。義経一行が、これからの事を相談しながら越えたことが、地名の由来といえます。

**菜摘川** 義経が菜摘川を下る筏を見て、「菜摘川中を流るる花筏うつつをぬかず日暮しのし」と詠んだといわれています。

**花籠神社** 静御前が花籠をつくった場所といえます。この籠はかつての吉野名産でした。

**風呂の瀨** 義経が潜居中、ひそかに水浴びをした場所といわれています。

**風呂の谷** 義経が水浴びした所といわれています。

**義経隠れ谷** 南菜摘の山中に隠れ谷という谷があります。同地には屋敷の跡が残っていて、義経がここに隠れたといわれています。

【龍門】  
**いま（わ）静** 千股の宇治間山の中腹にいま（わ）静というところがあったそうです。静が義経に会ったところだといわれています。

れていた頃、弁慶が病気がかかって、しばらく引きこもっていたそうです。快復した弁慶が、力試しに指先で石に釘を二本押し込んだため、弁慶力試しの釘といわれるそうです。

**横川寛範の首塚** 吉野山の中院谷に隠れた義経一行を打ち取ろうと、横川寛範を先頭に立て吉野衆徒が押し寄せました。しかし、家来の佐藤忠信が奮戦して寛範の首を取ったため、吉野衆徒はそれ以上の追討を諦めたのでした。今、中院谷の傍に寛範の首塚があります。また、横川寛範が佐藤忠信に打たれた場所には、「龍かへし」という岩があると伝わっています。

**義経の馬の足跡** 吉水神社境内の岸壁に、義経の馬の足跡と呼ばれる窪みがあります。義経が崖を馬で駆け登った時にできたと言います。

**義経の隠れ塔** 金峯神社の近くにあり、静と別れた義経一行がこの塔に隠れたところから隠れ塔といったそうです。やがて吉野衆徒の襲来を知った義経は、塔の屋根を蹴破って抜け出し、喜佐谷へと落ちたところから、蹴破塔ともいわれます。今は一重塔ですが、かつては三重塔だったと言います。この隠れ塔のあたりを「かくれ家の山」ともいったようです。

**義経の隠れ松** 大橋と黒門の間にあった老松です。義経が敵に追われた時に隠れたという伝説がのこります。昭和三十年代の台風で倒れてしまい、今は残っていません。

**弓立峠** 千股から滝畑へ越える峠を弓立峠という。義経がこの峠で弓を立てて休んだことからこの名がついたといわれています。



**義経の隠道** 義経一行は多武峰から細峠、西谷、城山の中腹、竜門の山口を通って吉野山に行ったそうですが、吉野衆徒に裏切られた後は、同じ道をたどって多武峰（牧とも）に落ちたといわれています。この義経の通った道はすべて山道で、義経の隠道というそうです。

【中龍門】  
**国造神社** 義経が度々参拝したと言います。

**白山寺** 頼朝に追われた義経が、当地で隠遁したと伝えられています。

【水分】  
**本善寺** 菜摘の静井戸に表れた静の亡霊を、飯貝に来ていた蓮如上人が供養しました。その蓮如上人が開いたお寺が本善寺です。

【国栖】  
**弁慶の腰掛岩** 南大野の吉野川に、大きな穴が開いて水のたまる岩があります。弁慶が腰を掛けたので、穴が開いたと伝わります。